

情報の多言語化と外国語教育



はじめに

情報は、本来、外部からやってくるものですから、多言語的・多文化的です。

人類は、その歴史を通じて、さまざまな異文化情報を翻訳移入し、自らの文化や生活を豊かにしてきました。

ヨーロッパの人々が、アラブ諸国の言葉やラテン語を学ぶことにより、古代ギリシア・ローマ文明の遺産を受け継ぎ、つい最近までギリシア語とラテン語の教育を学校教育の柱としてきたことは、よく知られています。

私たち日本人にも、江戸末までは、先進的な中国文明を師と仰ぎ、漢文の素養を身につけ、中国からの文化情報を至上のものとして移入してきた長い歴史があります。その文明観が、中国の阿片戦争敗退を機に大きく変化し、明治維新とともにヨーロッパ型の近代化路線に転換し、「和魂洋才」などというスローガンのもとにフランス、ドイツ、イギリスなどの外国の知識を導入しながら、現在に至っているのです。

そもそも外国語教育とは、こうした異文化情報の移入を主眼としたものであったといってもよいでしょう。

しかし近年のグローバリゼーションとコンピュータの普及による情報の氾濫によって、人類の異文化接触の機会が飛躍的に進化し、必要とされる異文化情報の量は爆発的に増加してきた観があります。

情報の発信者と受信者をつなぐメディアも、英語を世界語とする方向は否めませんが、その一方で、かつてない多言語化の方向をたどっているようにも見えます。このような状況のもとで、外国語教育の役割や技術は、大きく変化しています。

この報告では、まずグローバリゼーションのもとでなにが起こりつつあるのかを管見し、その上で新しい時代にそくした外国語教育を考えてみたいと思います。私は、フランス語の教員ですが、今回はとくに韓国語の翻訳ソフトと Wikipedia という百科事典を材料に考えて見ます。



1. グローバリゼーションとはどういうことか

20 世紀の後半まで、私たちはしばしば「国際化」について語ってきました。ところが 1990 年代に入ると、「国際化」という言葉が一举に色あせて「グローバリゼーション」あるいは「世界化」という言葉にとってかわられました。「国際化」から「世界化」へのパラダイム変換が起こったので。

私は、そこには 2 つの要因があると思います。

一つは、20 世紀の終わりにベルリンの壁が崩壊して、資本主義と社会主義という 2 つの異なる経済システムの隔壁がなくなり、市場が一元化されたことです。

この時点で、もっとも素早く行動を開始したのはヨーロッパ諸国でした。彼らは、ベルリンの壁崩壊を受けて、1992年にEC（欧州共同体）を発展的に組み替え、EU（欧州連合）に生まれ変わって、次々と国境の壁を越え、2004年以降、旧東欧圏の国々を次々と加えて、参加国を29カ国としました。現在は、さらなる政治統合をめざしてEU憲法あるいはEU基本条約の批准を急いでいますが、すでに1999年に欧州中央銀行の管理する単一通貨ユーロ導入を決定し、2002年2月28日に旧通貨の流通を終了しています。

この年の2月にリヨン大学で集中講義を担当していた私は、偶然、この歴史的な瞬間をフランスで体験しました。移行は、予想以上にスムーズに行われ、大きな混乱は見られませんでした。しかし、これによって何が変わったというのでしょうか？

たとえば、3月の中旬に予定通り講義を終えて、リヨンからアムステルダムに向かった私のポケットには、フランスで使い残したコインが何枚か残っていました。私は、広いアムステルダムの空港で、私はハンバーガーショップに入り、そのコインを使って昼食を済ませました。

これは、一見何でもないことのようにですが、とても大きな変化です。ヨーロッパ圏内に住む人も、旅行する人も、国境を越えるときにパスポートを見せる必要がないだけでなく、フランをギルダーに両替をする必要もなくなったのです。私は、その時、フランスの友人が言った「財布が一つになれば、人々はその便利さに気がついて、いやでも統合を加速させる」という言葉を思い出しました。その後、EU圏内で起こったことは、それをよく示しています。

それまで、誰もが絶対だと考えていた「フランスの鉄鋼会社」「フランスの銀行」「フランスの自動車会社」が、次々と統合合併で姿を変え、技術協力のネットワークを進め、「ヨーロッパの鉄鋼会社」「ヨーロッパの銀行」「ヨーロッパの自動車会社」に変身しています。そうしないと競争に勝てないのです。

こうした市場の流れに対応するために、EUはすでにEC時代の1985年にエラスムス計画という学生交流プログラムを立ち上げました。これは、拡大するヨーロッパ圏の多様な文化と多様な言語を現地で学ぶ学生を支援し、国境を越えてヨーロッパ全域で働くことのできる人材を養成し、人々の間に国籍を超えて「ヨーロッパ市民」としての自覚をもつことを促すための教育プログラムです。

1995年には、学生だけではなく教育者も交換するソクラテス計画が開始され、エラスムス計画はその一部になりました。この計画は、21世紀に入りソクラテスⅡ計画として強化され、2004年からは、さらにヨーロッパという枠組みを超えたソクラテス・ワールドという計画もスタートしています。

このプログラムは、ヨーロッパ域内で学ぶ学生の留学を支援して、4年間の大学生活のうち1年間を自国以外の大学で過ごし、出身大学で学んだ3年とあわせて4年で卒業する制度を作り、受け入れた外国人学生が言語を学ぶための施設を強化し、教育スタッフを整備することが主な目的です。

たとえばフランスにフィンランドの学生が留学した場合を例にとりましょう。フランスの大学は、まずフィンランド学生のために学生寮を準備し、フランス語学習を支援します。

そして大学の授業の内容をフィンランド人にも理解できるように工夫して、フィンランド人学生に「フィンランド人としての学習能力」があれば、フランスの大学の単位が取れるように支援します。

これは、いままで「フランスの大学で勉強するなら、あらかじめフランス語は自分の責任で勉強して、十分なフランス語能力をもって留学しなさい」という自己責任論を堅持していたフランスの大学にとっては、大改革だったと思います。

2. グローバリゼーション下の情報ネットワークの拡大

世界化の**もう一つの大きな要因**は、情報ネットワークの拡大です。

パーソナルコンピュータの発達とインターネット網の整備によって、それまで大きな障害であった国境や言語の壁を越えて、国家や企業や個人に関する情報が、以前には想像もつかなかったようなスピードで交換されるようになりました。情報の交換を助けるソフトウェアやインフラストラクチャーの開発によって、これまでは限られたエリートだけに独占されていた情報が、誰にでも簡単に、しかもローコストで手に入れることができるようになったのです。

20 世紀の間は、郵便や電話やファックスが、誰にでも利用できる便利な手段でしたが、現在ではコンピュータや携帯電話のインターネットやメールが情報交換の主流です。

新聞やテレビといった身近なメディアに関しても同じです。これらのメディアは、21 世紀の今日にいたるまで、たいへん便利で、誰にでも役立つ、多言語的で便利なツールとして立派に役割を果たし続けています。

たとえば、新聞の場合は、ポール・ジュリアス・ロイターがすでに 1851 年には英仏海峡の海底ケーブルを利用して英仏間の金融情報などを流していましたから、すでに 19 世紀の半ばには、国際間の情報が迅速に、安価なコストで交換されていました。

また、ロンドンのコーヒーハウスでは、それよりずっと以前から、誰でも世界各国の新聞を読むことができました。

ラジオ放送の歴史はずっと下って、1920 年 11 月 2 日にアメリカのペンシルヴァニア州ピッツバーグで放送開始された KDKA 局が最初だといわれています。

これはすぐに世界中に広まり、日本でも 1925 年 3 月 22 日に JOAK の放送が始まりました。

テレビ放送に関しては、さまざまな実験放送の歴史がありますが、日本では 1953 年 2 月 1 日から NHK の放送がはじまりました。

新聞、ラジオ、テレビというメディアは、その発足当初から、誰もが気楽に利用できる安価な情報源で、しかも多言語的でした。外国語を読んだり、聞き分けたりできる人たちにとっては、とても便利でした。自国語以外の外国語を理解しない場合でも、わずかな時間の遅れを覚悟すれば、外国にいても自国語の新聞はなんとか手に入りますし、短波放送などを利用すれば、外国でも自国の放送を聞くチャンスはあります。

テレビにいたっては、ニュースが多言語放送である場合もありますし、衛星放送やケーブルテレビを利用すれば、外国にいてもかなりの範囲で自国の放送を聞くこともできます。CNN のようなニュース番組を、同時通訳付でリアルタイムで聞くこともできます。

しかし、この便利な新聞、ラジオ、テレビには、共通した弱点があります。

それは、新聞社、ラジオ局、テレビ局という巨大な組織が、一方的に情報を取捨選択して発信しているということです。情報の受けてである私たちは、もちろん新聞を選んだり、チャンネルを切り替えたりして、好きな新聞や番組を選択しているのですが、やはり不自由です。情報の発信には、莫大なコストがかかるのです。

21 世紀に入って、テレビはデジタル化をいそぎ、双方向性の導入をはかっていますが、情報の発信源がテレビ局であることには変わりありません。

これに対してコンピュータは、基本的に自由に発信し、自由に受信する、情報システムです。既存の新聞、ラジオ、テレビ、出版のような巨大メディアを否定せず、それを個人的に統合し、自由に組み合わせ、個人の日常的な経験や思索を加えてホームページやブログやメールの形で発信することも可能です。

新聞、ラジオ、テレビのようなマスメディアに頼らなくても、世界中の経済危機や株情報や商品取引の情報を集めて、ネットを利用した株や商品のビジネスを行うこともできます。

時には、セカンドライフのような仮想空間に投資して、日常とはまったく違う生活をおくり、地球の裏側のブラジル人とカフェでトランプやサッカーゲームを楽しむこともできるでしょう。

このように開かれた可能性をもつコンピュータにも、もちろんさまざまな障害や制約や限界があります。

たとえば通信のスピードです。20 世紀末まで、個人用のコンピュータの多くは、電話回線を使って通信を行っていましたから、音声や映像の交換が難しかったと思います。しかしブロードバンドの時代に入って、この問題はほぼ解消されつつあります。

つぎに膨大な情報の処理です。これも Google を初めとする検索エンジンの驚異的な進化で、解決されつつあります。近い将来、世界中の国立図書館の図書を、自宅のコンピュータで検索し、ダウンロードして利用するサービスが開始されるのではないのでしょうか。

三つ目の問題は、言葉です。コンピュータのもっとも優れた特性は、国境を越えることです。しかし 20 世紀末までは、言語の壁がかなり強烈で、たとえばインターネットでフランス語のサイトにたどりついて、ちょっと前までは、文字化けして読めない言葉が頻発するといった場面に遭遇しました。

自分で作成したホームページにフランス語版や中国語版を付け加えようと思っても、日本で発売されているホームページ作成ソフトでは、フランス語や中国語が使用できないとか、もっとひどいのは、日本仕様のメールソフトを使うとフランス語のアクセントが使用できないとか、とにかく不自由でした。フランス語教師の私は、当初「このままコンピュータが普及すると英語にフランス語は駆逐される」と本気で危惧したものでした。

しかし実際にコンピュータが普及してみると、この問題は私の予想とはまったく逆の方向を歩み始めました。マイクロソフトが、いま一番大きな関心を寄せている問題の一つは、OS の多言語化だと思えます。たとえば、インドのような数多くの言語を抱えた大国では、たとえ共通語が英語であっても、たくさんの言語が支障なく利用できなければ、コンピュ

一タは普及しません。英語による世界制覇ではなく、多言語化による市場の世界制覇が、マイクロソフトの課題になったのです。

しかし、それにしても言葉は大きな壁です。この壁を、子供の頃読んだ「ドラえもん」の助けをかりて、主人公の野比のび太くんのように、食べるだけで外国語が話せてわかる「ほんやくコンニャク」のような道具を手に入れ、難局を乗り越えることはできないでしょうか？私は、それも部分的には可能になりつつあると思うのです。

3. 情報の多言語化と言語の壁

「ドラえもん」の主人公、野比のび太くんの弱点は、よい子だけれど努力しないということです。困ったことがあれば、なんでもドラえもんが、「しょうがないなあ」といって助けてくれるのですから、この性格は変わるはずがないと思います。


こういう性格の子供は、むかしから外国語教師の敵でした。外国語は、3000 時間とか、5000 時間とか、気の遠くなるような長い学習を必要とするといわれます。根気よく努力しない野比のび太くんタイプの学生は、学校では絶対によい成績をあげることが出来ません。

しかも大学での外国語学習には、制度上の問題もあります。たとえば専修大学で第二外国語を学ぶ学生の大半は、週 3 時間の授業を 2 回の合計 90 時間の授業を受けただけで卒業していきます。この外国語教育は、実際、なにかの役にたつのでしょうか？

私は、これまでいろいろな角度からこの問題に答えてきたのですが、今回は自分自身の体験に即して、コンピュータを介して韓国語を使うという場面から考えてみたいと思います。

私は、現在、韓国の国立安東大学校に事務局が置かれている比較民俗学会の日本事務局の仕事をしています。比較民俗学会は韓国の会員が 400 名くらいで、日本の会員が 40 名くらいです。インターネットのホームページとメールを利用して韓国事務局と連絡を取り、日本在住の会員に学会ニュースを流しているのですが、おそらく日本在住会員のなかで私が一番韓国語の知識のレベルが低いと思います。私は 1988 年のソウル滞在以来、韓国語との付き合いは長いのですが、まったくの独学なので、おそらく 90 時間の授業を受けた学生と同じくらいの実力だと自負しています。

こんなに運用能力のない私が、なぜ事務局のような煩瑣な仕事を引き受け、連絡係をしているかといえば、それは一重にコンピュータのおかげです。韓国事務局との情報交換は、メールで簡単にすませます。韓国語で受け取った情報は直ちに翻訳ソフトを利用して解読できます。私は日本語で手紙を書き、これを翻訳ソフトで韓国語になおして、メールにコピーして送信します。それだけです。

たとえば、「日本事務局の樋口です。2008 年春期学会に関して日本在住会員に案内を発送したいと思います。開催の日時と場所とテーマをお知らせください。よろしく願います」という簡単なメールを打つ場合は、 1 のようにソフトに入力して翻訳というボタンをクリックします。

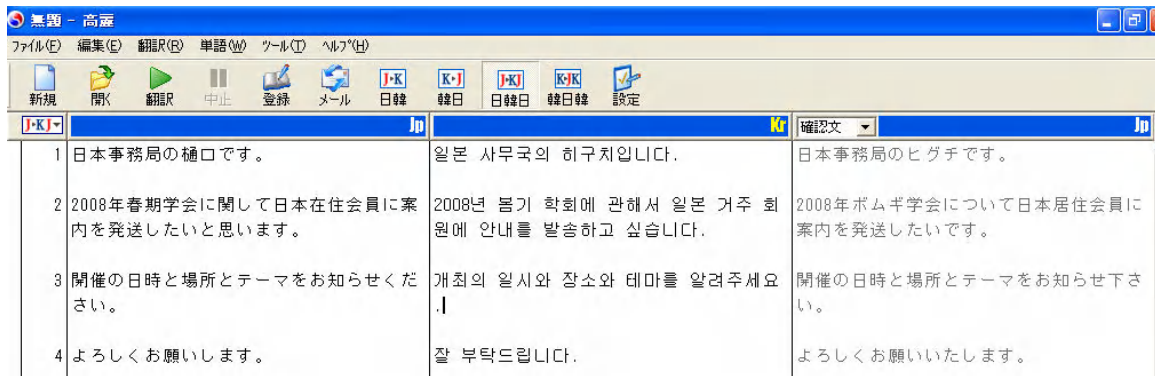


図1 韓国語翻訳ソフトの画面構成

すると「일본 사무국의 히구치입니다. 2008 년 봄기 학회에 관해서 일본 거주 회원에 안내를 발송하고 싶습니다. 개최의 일시와 장소와 테마를 알려주세요. 잘 부탁드립니다.」という韓国語とともに、「日本事務局のヒグチです。2008 年ボムギ学会について日本居住会員に案内を発送したいです。開催の日時と場所とテーマをお知らせ下さい。よろしくお願いいたします。」という日本語の確認翻訳があらわれます。

この翻訳ソフトの古いバージョンでは、日本語の確認翻訳がなかったので、かなり不安でしたが、進化したこのバージョンでは、安心していられます。

この翻訳で唯一問題になるのは、「ボムギ学会」という表現くらいです。韓国文の「봄기」が春期であることは、初心者でも分かりますが、どうしても必要な時には電子辞書などのお世話になればよいのです。

韓国語の翻訳ソフトは、少しコツを学べば、実に忠実な訳をしてくれます。もちろん、文章構造が複雑になると誤りが多くなりますから、なるべく単純な文章構造を選びます。また目上の人に手紙を書く場合には、敬語と話し言葉が混在してしまっていて、どうにも手のつけようがない場合もあります。そういう時は、お詫びを一言いれて赦してもらおうことにしています。

私は、この学会で責任上、年に2回の発表をしますが、その原稿は同じように韓国語翻訳ソフトを利用して作成します。発表そのもの



図2 パワーポイントの一場面 (左端は三遊亭円朝)

は日本語で行いますが、韓国語のパワーポイントを利用すれば、補助的な映像も利用できますから、へたな同時通訳よりもはるかに正確に私の考えをみなさんに伝えることができますと思っています。2007年の12月の冬季学会のテーマは「芸能としての語り」でしたから、落語と警女歌と昔話の比較をしました。(図2)

学会発表の場合は、さすがに翻訳ソフトだけでは不安ですから、時間のある時は、原稿を韓国人の友人に見てもらうこともあります。大抵は時間切れのぶっつけ本番です。

こうした安易な手紙の交換や学会発表は、私がフランス語を学び始めたころには考えられませんでした。

当時、フランス語の手紙を書くときには『フランス語手紙の書き方』というようなマニュアルを片手に、辞書と首っ引きでした。今にして思うと、そうして書き上げた手紙は「拝啓、貴下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます」にはじまって「敬具」にいたる実にしか詰めらしく捺をつけたものでした。

こうした習慣は、いまでも残っていて、もし封書で目上の知人や取引相手に手紙を書く場合には、やはり「拝啓」「敬具」になると思います。ところが、メールの場合には、見知らぬ相手に対しても、簡単な挨拶の後に、いきなり用件で済ませることができます。また、綴りや文法のミスにも、封書の時のような気遣いをしなくなりました。

コンピュータによる通信は、そのスピードだけではなくて、交換の形式や人間関係まで、カジュアルにしてしまったのです。

こうしたカジュアルなスタイルに対しては「品格に欠ける」とか「はしたない」という批判もあると思いますが、とにかく便利です。スピードを必要とするビジネスの場面では、きわめて有効なツールになると思います。

私は、こうしたツールを積極的に授業で活用すべきだと考えています。しかし、それとあわせて、これまで伝統的な大学教育が行ってきた「読み、書き、聞き、話す」という4つの技能を身につける教育プログラムを自信をもって実行すべきだと考えます。

翻訳ソフトは便利ですが、このツールの使いこなしに一番大切なのは、正確な文法の知識と、辞書をきちんと引くことのできる検証能力や軌道修正能力です。翻訳ソフトにとりあえず訳させておいて、まず翻訳の誤りを確認して、入力する日本語を適当に改めたり、韓国語の単語を入れ替えたり、敬語を使って表現を整えたりするには、初歩的な文法の知識が不可欠です。

コンピュータの利用環境が進化したおかげで、大学で1年間にわたって90分だけ勉強した韓国語が、実際の仕事に役に立つ場面が大幅に増大したと思います。

近年、「実用的な外国語」「使える外国語」教育の必要が強調されて、「読み」「書く」よりも「聞き」「話す」ことに外国語教育の比重が傾いていますが、情報社会が必要としているのは「読み」「書き」する力でもあるのです。

以上で話をしめくくってもよいのですが、次に、情報の多言語化の例として、ウェブ上に公開されている Wikipedia という百科事典を利用して授業を行った経験を紹介したいと思います。

4. Wikipedia という新しいツール

よく知られている通り、Wikipedia はウェブ上に公開されているフリーの百科事典です。この百科事典は、基本的には誰でも書き込みが可能で、Wikipedia 自身の「ウィキペディア日本語版」に関する解説によれば、日本語版は 2002 年にスタートしたそうです。以来、急速な成長をとげ、2003 年 6 月には 10000 項目を突破、2005 年 2 月には 100000 項目に達しました。


私は、2007 年度に「ヨーロッパの食文化」をテーマとした「ヨーロッパ研究特殊講義」を担当しましたが、授業の過程で、学生たちにこの百科事典の利用を積極的にすすめました。



その理由は、二つあります。ひとつは、この百科事典がまったくコストのかからない情報検索ツールで、項目数も多く、かなり正確だからです。学生は、情報科学センターや自宅で、自由に利用し、学ぶことができます。

もうひとつの理由は、もっと重要で、この百科事典が多言語で構成されていることです。デジタルの辞書や百科事典は、ほかにも優れたものがありますが、さまざまな言語にむかって、これほど開かれた事典はほかに例がありません。たとえば「ワイン」という項目を引くと、なんと 69 ヶ国語でのアクセスが可能です。

まず、学生たちは、英語がかなりできますから、英語の記事にアクセスすることには、まったく問題がないはずですが、日頃から英語が苦手だと思っている学生でも、ワンクリックですぐに手に入れられる英語の世界なので、抵抗が少ないのです。

ワインに関する英語の記事は、当然、日本語のページよりも材料が豊富です。写真やグラフや統計もたくさんあります。あらかじめ授業で説明を受けたり、日本語の記事を読んで知識のあるページなら、たとえ苦手な英語でも、興味をもって拾い読みしたり、写真や地図をダウンロードすることもできます。

さらに、この百科事典の優れているのは、記事のなかに指定された関連項目に、やはりワンクリックで飛ぶことができることです。たとえばワインという項目の「カベルネ・ソーヴィニオン」という葡萄の種類について書かれた項目に飛ぶと、日本語のページには  3 のようなカベルネ・ソーヴィニオンの写真があります。

これをさらにワンクリックして、同じ「カベルネ・ソーヴィニオン」の英語の項目に飛ぶと、さらに  4 から  7 までの 4 枚の詳しい写真がでできます。



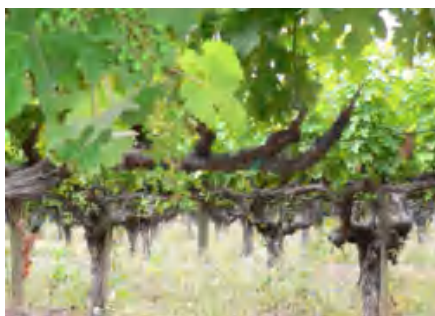
 3



 4



 5



 6



 7

ほかにも、ワインの産地であるボルドーに関する情報を求めれば、日本語版からもかなりの情報が得られますが、英語やフランス語に飛べば、豊富な地図情報がえられます。

さらに、ボルドー地方を領有していたエレアノール・ダキテーヌやジョン欠地王から百年戦争にいたる歴史情報も簡単に手に入ります。

Wikipedia は、英語以外のドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語、インドネシア語を、少し学んだ学生たちが、自分たちの学んだ外国語を駆使して、情報を検索する格好の舞台です。

私は、もちろん Wikipedia のほかに、Google などの検索エンジンの利用も奨励しました。もちろん、こちらも多言語で利用できますが、学生たちには圧倒的に日本語のサイト検索の方が便利で、外国語による検索はまだ手に余るに違いありません。

しかし自分の知っている外国語のキーワードを入れれば、たくさんの情報が集まってくるので、要領さえわかれば、かなり便利に使えます。

私がここで展開しているような楽観論に対しては、コンピュータを使って情報検索が簡単になると、学生たちは考える力を失うという批判をよく耳にします。たしかに、デジタルの情報を使えば、情報そのものを簡単にコピーできますし、図書館にいて参考図書を探す手間もいりませんし、あっという間にレポートの一つや二つ仕上がってしまうでしょう。

しかし、こうした流れは、もう変わることはないと思います。情報のネットワークが整備され、情報が国境を越えてしまうと、情報はとどまるどころを知らずに増え続け、誰もが、限られた時間のなかで取捨選択を迫られる場面に直面するに違いありません。そうした場面では、ある限られたテーマに沿って、素早く情報を整理する技術が大切になります。

たとえカット・エンド・ペーストで切り張りされたデジタルの情報でも、編集如何では、簡潔で分かりやすいものになります。編集の技術もまた、オリジナルな力であると思います。無批判に、流れ込んでくる情報を並べ立てるだけでなく、独自の視点から秩序立てて整理すればよいのです。

そして、その根源にある情報収集能力が、日本語だけに留まらず、軽々と言葉の国境を越えていくのは、とても大切なことです。日本語だけの限られた世界の向こうに、無限に近い情報が広がっていることを意識するだけでも、構想力は広がっていくと思います。

大学で一年間に 90 時間展開される外国語の授業は、こうした可能性も十分に意識して行われるべきだと思うのです。

5. まとめ

今回は、韓国語の翻訳ソフトとウィキペディアを通して外国語の教育について考えてみました。

最後に、韓国語と日本語の関係について、簡単に補足して終わりたいと思います。

韓国語の翻訳ソフトを初めとする多言語ツールが、使いやすいのには、二つの背景があると思います。

まず一つは、韓国の優れた情報ネットワークとアジア情報に対する関心の高さです。

たとえば、日本と韓国を代表する朝日新聞と東亜日報のデジタル版を比べてみましょう。

まず朝日新聞の場合は、日本語版以外には英語版しかありません。(図 8)

これに対して東亜日報の場合には、英語、中国語、日本語のバージョンがあります。



図 8 朝日新聞英語版



図 9 東亜日報日本語版



図 10 東亜日報韓国語版

【社説】李明博規制改革」を応援した経済研究所長たち



図 11 テキスト変換と読み取りアイコン

English donga | Japanese donga | Chinese donga | Korean donga



図 12 4カ国バージョン変換アイコン

この新聞のアジアに向かって、世界に向かって、情報を発信しようとする姿勢は、朝日新聞を初めとする日本の新聞よりもはるかに明確です。

しかも、日本語版の韓国語の記事には、おまけがあって、KoreanText という小さなアイコンをクリックすると、韓国語のテキストが現われるサービスがついています。(図 11) この韓国語と日本語の対照は、専門の翻訳者が練り上げたものですから、きわめて正確です。

東亜日報の日本語版を読んだ読者は、ただちに韓国語のオリジナル記事を読み比べることができるのです。(図 10)

このサービスは、中国版も英語版にもついています。

さらに、面白いのは、この4カ国のバージョンには、それぞれ自動音声による読み上げ機能がついていて、同じ内容の記事を4ヶ国語の音声で聞くことが出来ることです。(図 11) カーナビゲーションなどでおなじみの自動音声は、近年、急速に進歩して、かなりスムーズに文章を読みこなすことができます。

こんなサービスをして何の役にたつのかと、ふと疑問に思うこともありますが、少なくとも外国語の勉強には、たいへん便利です。韓国人の外国語学習者は、このサイトを利用して、英語、中国語、日本語のかなり高度な学習ができるでしょう。

こんな遊びが日本の新聞にもあったらいいのに、と思ってしまいます。

もちろん、このように書いても、日本の朝日新聞が、国際的なスタンダードから比べて、遅れていると主張しているわけではありません。たとえば、フランスの新聞のデジタル版を検索してみても、韓国のように国際化したサイトに会えることはありません。この種のデジタルサイトに必要なのは、記事の正確さと、量と、検索システムの完備です。国際的に最も信頼されている新聞のひとつ「ル・モンド」のサイトも、フランス語だけで構成されています。

しかし、今後はおそらくウェブ上の新聞のサイトは多言語化されていくでしょう。

特に東アジアにむかって情報を発信していく必要のある日本のマスメディアは、東亜日報の姿勢に学ぶべきことが多いと思います。

韓国語の翻訳ソフトを初めとする多言語ツールが、使いやすい二つ目の理由は、周知のことですが、言語構造や語彙がよく似ているということです。

たとえば「私は、この料理を食べたくない」などという否定の文章でも、「나는 이 요리

를 먹고 싶지 않다」という風に、まったく語順は日本語と同じです。そのうえ、日本語の「料理」は韓国語の「요리」で、漢字で書けば同じになってしまいます。

もちろん日本語と韓国語は、ときには「にせの友達」で、たとえば日本語の「勉強」は韓国語では「공부」で、漢字で書けば「工夫」です。また、韓国語をハングル表記した場合には、同音異義語が多いので、韓国語を翻訳ソフトにかけるととんでもない誤訳になることも少なくありません。しかし韓国語の漢字に由来する単語の使用率は日本語よりもはるかに高いので、漢字を使って韓国語を表現すれば、日本人には、その内容がほぼ類推可能です。

日本語と韓国語のようによく似た言葉は、世界中でも稀ではないかと思います。こんなに親しい関係が、どこの言語の間にもあるわけではありません。たとえば日本語とフランス語を翻訳ソフトにかけたら、とんでもない迷訳に悩まされることでしょう。

しかし、ここでふと考えたのですが、英語とフランス語の間では、翻訳ソフトがかなり役にたつのではないかということです。この二つの言葉は、構造もよく似ていますし、単語にも共通のものが多いと思います。また、もしかするとスペイン語とイタリア語とポルトガル語の間なら、翻訳ソフトの使用は、もっと簡単なのではないのでしょうか。

今後、おそらく私のように楽観的に考える人間が増えてくると、こういう翻訳ソフトの利用法も普及する可能性が少なくないのではないかもしれません。

もし英語とフランス語との間に「使える」翻訳ソフトがあれば、日本人にはとても便利です。

中学程度のレベルで理解できる簡単な英語の文章をコンピュータに打ち込めば、簡単なフランス語になって返ってくる。こんなソフトを利用して、日本人がフランス語の学習に励むことも出来るかもしれないのです。

私は、幸い、2008年の9月からフランスで6ヶ月生活することになりそうです。その間、少しフランスのコンピュータとネットワークの事情を勉強して、ついでに英仏の翻訳ソフトも利用して、いずれ大学での外国語教育に役立ててみたいと思います。

(これは、2009年12月に行われた専修大学LL研究室の研究会報告レジュメに加筆した論考です。)